

北九州市林業研究グループの活動について

— 結成20周年を記念して —

2000.07.11

1、はじめに

1981年(昭和56年)7月11日に北九州市林業研究グループ(当初は、北九州市森林組合青年部)が結成され、ちょうど20周年を迎えます。この報告をまとめるにあたり過去20年の我が林研の歴史を調べる中で、知らなかったり、今では忘れてしまった先輩方や同朋達の山にかける情熱や努力が生き生きと甦ってきました。

今日、ともすれば停滞感に陥りそうになる林研の活動ですが、先人達の、或いは、我々自身の活動の中に、我々の活動を示唆するキラリと輝くものがあるように思います。

20周年を記念し、ただ報告をまとめるのではなく、この歴史の宝箱から経験や教訓をつかみとり、以降も生き生きと山とかかわり、活動が出来れば幸いです。

2、北九林研の地域的背景、特徴について

北九州市は、人口102万、古くから工業都市として発展してきました。九州の最北部に位置し、東西に33km、南北に34km広がり、面積は480.6km²、年平均気温16℃、年間総雨量1,400mm、北部と東部は海に面し、中心部から南部は山地となっています。

森林面積は、19,068畝(国有林2,854畝、民有林16,215畝)で、民有林人工林率28%(県平均66%)となっています。北九州の森林の特徴は、①椎などの照葉樹林が多く、杉などの人工林が他地区より少ないこと、②竹林が1,447畝あり、日本一を誇ること、③都市部を囲むように森林があることなどです。

本市の林業は、他地域と同様に木材価格の低迷や後継者の不足などから林家の経営意欲が減退し、停滞しています。このため保育作業の不足による森林の荒廃が目立ち始めています。他に不在山林地主の増加や竹の林地への浸食、拡大など深刻な問題になっています。

一方で、典型的な都市近郊型林業地であることから、水源の涵養やレクリエーションの場としての期待が高まっています。「合馬たけのこ」のブランドで知られるタケノコの生産も盛んになっています。

3、グループの活動の歴史 <別紙資料：林研の歴史年表を参照>

1981年7月11日に、「祖先が孫々営々とした育林」「山こそは不変の恒久的資産」「林業の後継者は吾等である」「森林こそは、子孫に遺す最高のもの」と設立趣意書にあるように、情熱と高い気概、誇りをもって、山と地域を愛する先輩方によって北九州林研は結成されました。

磨き丸太、間伐、枝打ち研修、先進地視察、竹炭作り、良質早出しタケノコ技術など、活動を地域ぐるみで経営に結びつける努力がされてきました。また、森林浴や植林などで都市住民との交流活動も1987年から今日まで毎年継続されています。

北九州林研の活動の特徴は、以下の3点にまとめることができます。

① 良質タケノコの生産のための取り組み

伐竹林内整備、作業道、客土、早出しのための列状伐竹、パイプハウスなどの施工や作業のグループ化などをすすめ、遠隔地出荷のための出荷組合の組織化を行い、1987年には京都市場に進出しています。

また、検査の徹底や等級カラーテープ表示の導入など販売努力を行い、「合馬たけのこ」のブランド化をすすめ、成果をあげています。

② 百万都市北九州市にある林研グループとしての特徴

1987年の「ふるさとの森交流会」に始まり、「森林浴の森交流会」「ウイ・ラブ・フォレスト交流会」を経て、現在の「グリーンパートナー一定着促進事業」を行い、積極的に都市住民との交流をしています。今日まで、延べ900名を越す方々が参加されています。

森林林業の大切な役割を共に学んだり、間伐、枝打ち、植林などを体験するなかで、林研に参加する方が出てこられたのは、大きな成果です。

また、交流会参加者の方から、間伐材を利用した木工グループ作りが提案され、この秋に向け準備をすすめています。

③ 会員相互の自主的な活動

先進地視察、間伐、枝打ち技術の向上、竹炭竹酢液や遊休林地の活用などの現地適応試験などの自主活動を行っています。

キンメイモウソウ竹のタケノコの生産や北九州市森林組合の竹炭竹酢

液生産の基盤、里山資源を活用した有機農業技術の構築など、この活動から得られた成果です。

また、台風による風倒木処理にはじまり、作業道作り、間伐や地拵えなどの共同作業を毎年実施し、共に汗を流しています。

4、グループの現状と今後について

この間、会員が減り、7名の時期がありましたが、この2年間で4名会員が増え、現在、11名（平均年齢45歳）で活動しています。

会員は農林業を中心に、それぞれの地域で中核的な役割を担い、多岐にわたる活動をしています。

これまで定着してきた林研の活動を継続しながら、先輩方が我々に残してくれた財産を、次の世代にどう渡していくのかを真剣に考え、実行していく時期に来ていると思います。

また、環境問題が叫ばれる中、都市住民との交流に止まらず、彼らとの共同作業で環境保全への取り組みや林業と農業、漁業の結合が必要な時代になってきているのではないのでしょうか。

「林業の後継者は吾等である」ことを忘れず、山を愛する仲間とともに頑張ります。

5、おわりに

意気込みに反して、十分に著せなかったこと、つかみきれなかったことが、まだまだ沢山あるように思います。

今の活動の方向を大事にしながら、これまでの活動の1つ1つを互いに点検したり、それこそ林研を離れた同朋、先輩方1人1人に膝を交えて話を聞く活動を通じて、我々の活動を二廻りも三廻りも、その厚みを増す事ができるのではないのでしょうか。